

平成27年度岡山県子ども読書活動推進会議第1回会議の概要

- 1 日 時 平成27年8月6日(木) 13:30～15:30
- 2 場 所 岡山県立図書館サークル活動室
- 3 出席者 相賀委員、大村委員、岡武委員、白神委員、塚本委員、徳山委員、藤井委員、森本委員、湯澤委員
平委員欠席(五十音順) 出席9名欠席1名 計10名

4 概 要

- (1) 第3次岡山県子ども読書活動推進計画の進捗状況等について
事務局から資料により説明した後、各委員から御意見をいただいた。

(委 員) 学校図書館の現状に関する調査結果等、事務局の説明についてどうだろうか。小学校一斉読書の頻度の減少、学校図書館の学校司書の配置について等、何か補足的なことはないか。

(委 員) 昨年度までは、週に2回、一斉朝読書を実施していたが、今年度からは学力調査の結果を受けて一斉漢字小テストを行うことになり、朝読書は週1回になった。読書は大切だが学力保障も必要であり、そちらにも目を向けていかないといけないので難しいが、週1回の朝読書を大切にしている。ボランティアの方の協力により、2ヶ月に1回、1～6年生までボランティアの方による読み聞かせを行い、少しでも充実したものにしようと取り組んでいるが、量的には充分ではない。学校司書の現状についても、事務局の説明にそのまま当てはまる。学校司書は中学校との兼務で、中学校は週に2回・小学校は週3回である。3年前までは中学校に司書はいなかったが、学校司書が配置されてからは、中学生の貸出冊数が4倍に増加し利用率がかなり伸びた。

(委 員) 現状として学力保障が必要となり、学校現場では限られた時間の中で、時間の駆け引きや葛藤をしながら取り組んでいる。漢字が読む力の前提になるので、うまくつながってくればよいのだが。今後はさらに外国語活動が入ってくると、読むことがいかに大切かを常に確認していかないと、益々読書の時間は削られていく一方である。

また、中学校で学校司書の配置によって図書館の利用者が増えたという事例を聞くと、人が大切であるということを改めて実感することができる。

調査結果の中で、小中学校の蔵書のデータベース化について、図書館のコンピュータの整備がされていないのに驚いた。蔵書管理の上で大切だと思うが、これは現場としては難しいのか。

(委 員) 中学校では、市によって現状は違っている。新しく図書館を整備する市は新しくデータベース化をしている。岡山市では学校ごとに蔵書をデータベース化し、市内の公共図書館で使用できるようシステム化している。徐々にではあるが、広がっている状況である。

- (委員) 平成26年度の中学校のデータをみると、蔵書をデータベースで管理している学校は多い。調査項目の「図書館にパソコンの整備をしている」というのは、直接子どもが活用できるかどうかという意味ではないのか。
- (事務局) そのとおりである。生徒がインターネット検索等を行える設備があるかどうかということである。
- (委員) 全校一斉読書の実施率は中学校は上がっているが、実質本を読むという点について現状はどうか。
- (委員) 国や県の調査では、本に親しむ子どもと学力の相関関係があると出ている中で、できることを少しでも行っていく、というのが中学校現場の状況である。量的には毎日少しずつではあるが、読書の意義や意味合いを持って、教員もしっかり取り組んでいる。小学校では、毎週集会や曜日ごとに行うことがいろいろ決まっており、そういう中で一斉読書の時間を増やすのは難しい現状である。10%、20%という単位で実施率を上げていくのは考えにくい。
- (委員) 中学校の「一斉読書を毎日やっている」項目の実施率は疑問である。実質はどうであるかわからない。決められた期間であれば、その間は毎日行っているかもしれないが、本当に毎日実施しているかどうかかわからない。
- (委員) 教員が指導的な意味を持って行事等で行っている場合もあるだろうし、学校によって違うであろう。ただ、教員の意識が「一斉読書は必要だ」という認識の上で、この結果に出ているので、大変参考になる。調査の結果以外に、取組状況についてはどうだろうか。県立図書館では開館10周年記念でいろいろイベント行っているようだが、詳細についてはどうか。
- (委員) 担当が他課になるため全体を把握できていないが、講演会や子どもの会等、幅広く多くの行事を行っていた。関連事業のビブリオバトルは岡山県読書推進運動協議会が行っていたもので、事業としては昨年度で終了している。参加人数には見るだけの人も含まれているので、実情としては分析の必要がある。ボランティアのスキルアップ講座については、多くの方に参加してもらい、とてもいい研修となっている。図書館職員の研修講座は、年10回全てが子ども読書関係の研修ではない。館長研修や新任の研修が含まれており、昨年度は子ども読書関係の研修は実施されていない。公共図書館ということで様々な研修が必要であり、プログラムに入れることができなかったが、今年度は入れていかないといけないと思っている。
- (委員) 学校の読書活動は、学校司書がキーパーソンであり、学校の読書活動推進の大きな鍵となっている。地域における読書活動の鍵は図書館司書にあり、果たす役割は大変大きいものである。学校であれ図書館であれ、司書の果たす役割は大変大きく、司書への研修が大変重要で

あると改めて感じている。研修の参加者の内訳や広がり等はどうなっているのか。

- (委員) 昨年度から研修担当であるが、決められた計画の中で研修を行っていた。研修関係でいうと、県立図書館は基本的には公共図書館の研修が中心となっており、学校図書館の研修を多く行うことはできない。昨年度はできなかつたので、学校図書館の研修は本当に大切だと実感している。県立の学校司書は隔年研修を行っており、毎年の開催ではない。司書教諭の研修については、基本的には新任の研修を行っているが、新任の研修以外、研修の場はないようである。司書教諭の研修の場を確保していくべきである。研修等を通して、よい事例を持ち帰ることができ、大変有効であるので、司書教諭への研修を検討してほしい。

学校図書館問題研究会の研修に行ってきたが、そこで出た話として、教員・行政の理解が必要だという意見があった。行政に理解してもらうためには、邑南町の取組は大変すばらしく参考になるので、教育委員会の方に、ぜひ見てほしい。

- (委員) 県立図書館は公共図書館としてのミッションがあり、県の中心的な役割を果たしている。学校は学校、教育委員会は教育委員会それぞれのミッションがある。そこで、県教育委員会という広い立場で司書の配置と研修について考えてもらいたい。非常勤の司書の配置により学校図書館の利用が大きく変わったという事例もあったように、学校司書の配置は必要である。また、研修については、司書が参加しづらい現状に対して、研修に出やすい環境作りや研修に出られない場合のアウトリーチ等を考えてもらいたい。司書にとって情報交換等の研修の場は必要である。実際に当市の司書も県立図書館や他市町村の取組などを知らない。研修に参加し、いろいろな事例を知ることで刺激を受けるだろうし、身近なところで、隣の図書館の取組など情報を共有していくことが必要である。

- (委員) 学校図書館の紹介事例にもあったが、図書館で本を借りる数ばかりが目につくが、実は子どものそばには、目を輝かせて本を読んでいる子どもの様子を見て、喜んでいる司書の姿がある。こういった司書の経験を共有できるような交流の場が広がっていけば、『うまくいったときにどのような工夫があったか』を共存でき『行き着く先は人である』というところで、人がいかに子どもたちの側にいることができるか具体的な取り組みを考えていけるということになる。孤立しては、なかなか頑張れないので、研修や交流の場を作っていってほしい。気運を高めるという点でも、この会議でこういった意見が出たことは大変意味があることである。

- (委員) 岡山市は学校司書が100%配置されており、図書館部会や司書だけで、休日等に自主的に勉強会を行ったり、積極的に研修会等に参加

したり、いろいろな活動を行っているが、その司書の中でも温度差がある。岡山市の司書配置は長い歴史があるので、単に本の貸出だけでなく、授業支援や資料提供等の業務に関わっている。司書教諭と学校司書が協力・連携し、授業を行っている事例も増えている。司書教諭と学校司書が連携していくことで、うまくいけば学力向上につながることを期待している。司書の役割が本の貸出だけでなく、司書教諭との連携により学習支援もできることをPRしていくと、学校司書の常勤配置への可能性が出てくるかもしれない。

調査の中で、学校司書の常勤配置があまりにも低いのでびっくりした。いつ行っても開いている図書館の良さを子どもたちに知ってもらいたい。子どもの置かれた環境によって大きな違いがあるのは問題があるので、県下統一で整備してほしい。学校司書の配置がない学校では、国語の教員の意識の有無によって変わる。熱心な先生は自分で学校図書館について勉強や研修に行っているので、意識が低いところには、県の方から指導が必要ではないか。

- (委員) 県北の方では司書としてではなく支援員として学校へ入っている場合があるが、支援員は数字の上では上がってきていない。支援員の方も、ほとんどの学校司書と同様に非常勤である。

(2) 平成27年度子ども読書活動推進事業について

事務局から資料により説明した後、各委員から御意見をいただいた。

- (委員) 今年度の新たな事業の4つの柱のうち、幼児期の土台作りでは、家庭での子どもと本との関わりについて、どういったことを期待するのか。

- (委員) 活字離れの元は、未就園の子どもたちへの親の関わりが大きい。今までの話を聞いていて、人が大切であることがとてもよくわかる。幼稚園には司書がないので、子どもたちは、自分の大好きな先生や大好きなお母さんから読んでもらえる本が大好きである。先生や親に読んでもらった本を好きになるので、幼稚園にも小・中学校向けに作成された「おもしろ読書事典」のようなものがあれば助かる。人が充てられない状況の中で、選書の参考となる事典があれば、先生自身にとっても本との出会いにつながり、大変ありがたい。

先日、親育ち応援学習プログラムを園で実施したが、参加者は子どもたちと関わるのが大切だと改めて実感した。場や時間を確保して子どもたちのことを考えるということはとても大切であると気づいた。これは、子どもと本との関わりでも同じである。

預かり保育の子どもたちと本を一緒に探している時に、本とふれあうことで、とても盛り上がった。そういった楽しい経験は子どもたち

にとって大切であり、それを親に伝えることに意味がある。絵本に関わる子どもたちは平等であってほしいと思っているので、親だけに任せっぱなしではなく、現場の我々が楽しい本と触れあうきっかけを作っていかなければならない。幼児版のビブリオバトルを考え、実際にしたことがあるが、子どもたちは友だちが好きだから、その本を好きになっていた。こういった経験は本を好きになるきっかけ作りとなっていた。幼稚園では、本を好きになるきっかけとなる場や時間を作ってやるのが大切であり、そういったことが絵本離れを止めることにつながるのではないか。また、幼稚園でのそういった楽しんでいた状況を親へ発信してあげることが、大切であると思う。

さらに絵本の楽しさは人への興味につながる。読み聞かせをしてもらったときは絵本だけでなく、読み聞かせをしてもらった人を好きになる経験につながる。再度お願いだが、幼児版のおもしろ読書事典を作してほしい。

- (委員) 幼児版のブックリストは山ほどある。幼稚園の保護者であれば、読む本はどんなものでもよい。本を介して親と子どもがその時間を共有することが大切であり、先生と子どもたちとの関わりを発信することに大きな意味がある。知っている本を誰かと共有したり、知っている本をもう一度自分でも読んでみたりすることが楽しかったりする。幼稚園でこういうことに取り組んでいるという投げかけが、幼稚園での読書支援になり大変重要である。先生方の勉強のためであれば、そういったリストを参考にすればよいが、本は人によって好みが違うのでブックリストに載っている本でも、子どもによって反応は全然違うので、とらわれる必要はない。

親育ち応援学習プログラムをいま作成しているが、内容は保護者が読み聞かせをする時の問題解決につながるような、乳幼児の保護者をターゲットとしたプログラムを考えている。

- (委員) 発達心理学で、子どもの健やかな育ちのあり方や絵本の研究をしているが、今の子どもの育ちに合う絵本は、親も育てるものである。いかに子どもを育てるべきかという点で、方向性がわからないお母さんもいる。絵本を就学前の準備段階の道具として使ったり、しつけの一環として使うといった目的の読まれ方をすると、子どもは本から離れていく。お母さん方にある種の誤解がある。本を届けることは大切であるという点については、先の委員と意見は一致しているのだが、こういった本を家庭まで届けるかというのを見通した関わりが必要である。幼稚園での研修の場というのもあるが、世の中に本は非常にたくさんあり、幼稚園・保育園にぜひ置いてほしい本やどこかで読めばよい本など、質の問題はある。すでに研修をしているようなので、今後も引き続き、園の研修の中で、絵本を選ぶ目を幼児教育の内容として入れておいてほしい。プログラムの内容としては、この会議の目的に

立ち返り、『豊かな心を育てる』という点から、「どういった絵本があるべきか」「どういった親子関係であるべきか」「子育てに悩んでいる時に抱えている誤解をどのように解いてあげるべきか」等を考えないといけないので、そういった点を踏まえた内容になるよう期待している。

読書活動につなげるための環境づくりとして、小中学生を対象に読書手帳が作成されている。自分自身、子どもの読書会を開催した経験から、心に残ったことや気に入った場面・登場人物をちょっと書いておくと、そのメモをきっかけに話しやすくなる。記録に留めておくと記憶にも留めやすく、紹介しあうことができる。読書手帳の活用方法として、そういった活用の仕方もある。取組校の子どもたちの反応はどうだったか？

- (委員) 6月末～7月始めに、各学年の図書時間に説明して配付した。担任している3年生は、基本的には嫌がらずに取り組んでいる。読むことは好きだが書くことに抵抗を示すかと思ったが、特に抵抗を示すこともなく自然に取り組んでいる。早い児童は7月末にすでに手帳1冊を記入し終わった子もいる。高学年では、本を読むことが好きな子どもが熱心に書いているわけではない。また、中には司書へ書き方を相談に行き、一緒に手帳を書いている児童もいる。今後、手帳に記入したことを紹介し合ったりするなど、学校司書とも相談しながら、さらに工夫して活用していきたい。
- (委員) 推進事業の3点目のつながりという点で、高校生の意識づけとしてのおすすめ本の募集事業はどうか。
- (委員) 小中学校と違って、高校生は子ども自身も多様化し、学校によっても大きく違って様々であり、環境も全く違うので、県下一斉で何か取り組むというのは大変難しいと感じた。しかし、今までこういった取組をしたことがないので、やってみてどういった反応が返ってくるか楽しみである。実施してみて、次の施策を考えたり、見えてくるものがあるのではないか。
- (委員) 最終的にはどうなるのか。
- (事務局) 冊子ではなく、チラシで紹介する予定である。チラシに掲載できる本の分量は限られているので、ホームページ等に応募のあったおすすめ本を掲載し紹介する予定である。
- (委員) 推進事業で、研修の充実・つながりという部分ではどうか。会議の前半で研修の必要性や現状について把握することができたが、今後期待すること等、何かないか。
- (委員) 本校が県学校図書館協議会の事務局をしており、学校図書館担当者や司書に対して研修を行っている。この研修については、県立図書館や行政での在勤中は知らなかった。事務局という立場になって初めて、各支部ごとにいろいろな研修を行っていることを知った。

近年、県立図書館と生涯学習課はとてもよく連携できている。県内には、有志の研究会や小さな組織等がたくさんあり、いろいろな動きがある。県下のこういった動きを一体化し、情報を得る・状況を知ることとは必要であり、子どもの読書活動において、県内でどの組織や機関が中心となるのかを明確にしておいた方がよい。位置づけとしては、生涯学習課ではないか。情報を集めるということを期待している。中心的役割が生涯学習課であれ、学校図書館協議会であれ、県立図書館であれ、いずれにしても情報共有が重要である。

(委員) 個人的な意見になるが、自分は研修担当ではあるが学校図書館司書部会の方との接点もないし、学校図書館協議会の中に入って情報を得るようなことも無く、他団体との連携がイメージしていたものとは違ってなかなか動けない状況にある。どういうスタンスでやっていくか人の配置をどうするか等、連携強化のためにどうしていくかが課題となる。実際どういった状況なのか、どのような活動をしているのかわからない状況で研修を行うのは難しい。県北に勤めていたが、岡山市のようなところは稀であり、なかなか研修する場もなく連携も難しい。個人の有志で情報交換する程度であった。研修をすることで力量が上がり、それを還元することになる。こういった研修を充実させるために、どこがリーダーシップをとって動いていくのか。

学校現場では、先生方が図書館について知らないし、忙しい状況の中で、図書館の重要性までなかなかたどりつかないといった現状である。今後は、学校教育課から予算配分してもらうために、しっかり情報提供し知ってもらう必要がある。そのためにも、義務教育課と高校教育課との連携を力強く進めていってほしい。県立図書館はできることについては進めていくつもりである。

子どもたちに、本と出会うきっかけをつくっていくのは教員であり、学校教育の中で、いかにそれを意識する教員が増えるかが要である。教員の意識向上のきっかけづくりとして、情報提供等の働きかけが必要であり、中心的な役割を担うのはどこなのかを明確にすべきである。

お知らせとして、教員が忙しい状況の中で、小学校教員がどれくらい図書館を活用しているのか知りたいのでアンケートを採りたいと考えている。実現するかどうかわからないが、小学校教員の意識調査のデータを検証し生かしていきたい。そのデータやいろいろな情報を学校図書館協議会等とも共有して、一緒に学校図書館の充実を図っていききたい。これも連携になるのではないかと思う。教員の理解・行政の理解が要となり、忙しい先生方をどのようにバックアップしていくかも課題となる。まずは、身近なところでどうつながっていくか、考えていってほしい。

(委員) 当市の学校司書は全校配置ではなく、一人が何校も兼務している状況である。各学校の先生の意識がもっと図書館の方に向いてもらえた

らと、いつも感じている。学校司書をバックアップするのが県立図書館や公共図書館の役割だと思っている。人とのつながりも大切だが、図書館同士の間もつながりもとても大切である。

いろいろな調査結果が出ているので、読書に関わる私たちは、これらの現状や結果を把握しておく必要がある、推進計画等も意識しておくべきである。自治体によって取組や現状等に大きな差があると思われる。

当市の取組として司書が選んだ絵本や紙芝居を月に1回、保育園と幼稚園に配本し、紹介している。園が所蔵していない本を紹介することで、情報提供や支援になっており、幼稚園や保育園とも関係を持つきっかけにもなっている。小さな図書館では、大きな取組はできないが、人とのつながりを大切にしながら業務を行っていきたいと思っている。

(委員) それぞれの場で大人が本気でつながろうと思えばすごい力が生み出される。子どもたちを真ん中に、良い本を手渡していけたらと思う。本会議では、表層的な話ではなく、かなり深いところまで話をすることができ、実情を知ることができた。